

館山支部だより Vol.130

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



《シコンノボタン》
一日花、あとからあとから咲いては散る花
原産地はブラジル
＜拙宅の庭先から＞

ようやく秋の気配が感じられる今日この頃です。
ともかくこの夏は気象統計始まって以来の連続猛暑日数を記録し、また全国各地で線状降雨帯が発生し記録的な集中豪雨に見舞われるなど、異常気象というよりは異常事態と言っても過言ではないと思います。
被災地の早期復興を祈念するとともに会員諸兄、ご家族皆様方のますますのご健勝、ご多幸をお祈り致します。
＜支部長 川村 巖＞

支部の活動概要

《10・11月の活動予定》

- 10.10(金) 旧海軍館山砲術学校
予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
10.11(土) 県隊友会臨時支部長会議(千葉)
11.14(金) 館山航空基地殉職隊員追悼式
館山航空基地開隊72周年記念行事
11.29(土) 支部役員会(コミセン)

《8・9月の活動実績》

- 5.27(土) 5月支部役員会
(コミセン、別法)

隊友会機関紙「隊友」の配付に関する事項

7月から隊友会機関紙「隊友」は、アンケート調査結果に基づく配付希望者のみに配付しております。
ペーパーに代えてWeb隊友誌の閲覧を推奨するものです。(閲覧については下記参照)
今後、隊友誌(ペーパー)からWeb隊友誌に変更(逆も可)を希望する場合は支部事務局へご連絡下さい。
＜館山支部事務局 メール g_marine@f5.dion.ne.jp Tel. 0470(22)0230＞

参考《隊友Web新聞閲覧のためのパスワード等》 2025.9.1現在
隊友会本部HP； <https://www.taiyukai.or.jp/membership/>
ユーザー名(ID): taiyukai パスワード: iwasaki2025 ※
※パスワードは定期的に変更されますので、その都度連絡します。

＜右から続く＞ あらゆる資源に不足する日本が、欧米列強に伍して富国強兵を掲げ、国策として軍備の増強とともに戦争に耐える力を備えるため、総力戦研究の成果を待つまでもなく、国策として資源の確保を東南アジア、中国、南方に求める施策を推し進め、物資等の備蓄に懸命な努力を積み重ねてきた。取分け艦船・航空機の動力資源(原油、艦船用重油、航空機用ガソリン)については愚直なまでに備蓄努力を払った。
序であるが航空機用ガソリン(「航揮」)については、横須賀と長崎の2箇所に集中的に数十基の備蓄タンク(5000KL)を建設し、日米戦を想定して開戦後2年間の航空作戦に持ちこたえる燃料の備蓄を進めていた。
なお館山の赤山に今なお残されている2カ所の巨大な堅穴は、航空揮発油槽(各5000KL相当)の工事跡(戦前に着工、未完)と考えられるが、全国数多くある航空基地の中でなぜ館山だけに計画されたのかについては定かではない。
＜館山地域史探索マニア その52＞

雑想：再び「AI（人工知能）」について

以前このコーナーでAI(人工知能)について述べたことがあります、その進化がとてつもなく急テンポであることに老骨ならずとも戸惑う人々が少なくないと思うのです。「Chat(チャット)GPT」なる生成AIが世界にデビューしたのは3年前の2022年だったと思うのですが、またたく間に世界的なブームを巻き起こし、毎日の新聞紙面のどこかに必ず生成AIの文字が載っていると言ってもよいですね。

東欧のアルバニアという国では、内閣の閣僚に世界初の「AI閣僚」を任命して、公共入札の管理・決定を担う権限を与え、これによって汚職の撲滅を目指しているとか。しかし国民の間には「憲法違反」の声も上がっているようで今後どのようになるのか予測が難しいところです。

日本でもAI閣僚はまだにせよ、社会ではすでに多くの分野で日常的に生成AIが使われているようです。自治体の例をあげますと窓口総合案内サービスは序の口として道路管理システムやAIリアルタイム議事録、職員の勤務実態分析・可視化サービス等々、まだまだ他に遅れをとらぬよう始めた段階？で今後さらに進化し広まることは間違いないと思います。ただ大いに気懸かりなのは、すでに兵器として実戦に投入されたものもありますが、AIが兵器だけでなく軍事面での応用範囲がますます広まることは必至だと思います。そういう意味でもAIの進化、応用については我々も無関心ではおれないと思うのです。

そもそも生成AIとは、「人が作り出すようなテキストとか画像、音声等々のデジタルコンテンツを自動的に生成する技術」ということで、これを「深層学習とか機械学習の手法を駆使」して自動的に生成させる、と定義付けられているようですが、コンピューター音痴にとっては「コンピューターに学習させる」という言い回し自体に抵抗を感じるのです。

ともかく生成AIは今後とも無限の進化を続けることと思うのですが、ただ「人間の脳の持つ機能、具体的には痛いとか 美味しい・不味い、暑い・寒い、気持ち良い、気味悪い、面白い、不快等々の感覚機能」を コンピューターにどのように学習させ どのように処理させるのか、という素朴な疑問が頭から離れないのです。

＜コンピューター音痴の米寿を迎えた会員(海)＞

かつての「総力戦研究所」とは何をしてたところ？

先月NHKのドキュメンタリー番組で我が国の戦前の「総力戦研究所」が放映されていたが、得てしてこの総力戦研究所の研究成果が無謀な戦争の教訓・反省として引合いに出されることが多いようである。実態はどうだったのだろうか。

膨大な研究成果は公的な記録としては残されていないようであるが、防衛研究所の保管資料によれば、総力戦研究所は最初は陸軍の経理局に置かれていた「戦争経済研究機関」で、軍人のほか一般の文官(制服以外)が加わり、「国防」について率直な議論を交わし、国防の方針と経済活動の指針を考察し、国力の増強に資することを目的としたものであったと言われる。

S15. 10に内閣総理大臣の直轄機関として「総力戦研究所」が開設されることになった。所長は文官で所員は陸海軍軍人と各省庁の文官で構成された。そして日米開戦の年のS16. 4月に第1期研究生として35名(軍人5名、文官22名、民間人8名)が入所し、S17. 3に卒業している。とかく話題になるのは、この第1期研究生の研究成果のことであろう。

日米戦を想定した総力戦机上演習

日米開戦の半年前に日米戦争を想定した総力戦机上演習が行われた。統裁部(研究所)から与えられた想定状況や課題に対して、研究生たちは軍事・外交・経済の各局面での見通し(兵器増産、食糧自給度等々)について膨大なデータに基づく分析や日米戦の展開予測等、2箇月余の研究の末導き出された結論は、「長期戦必至、日本必敗」であったと言われる。

首相官邸で行われた東條総理大臣の講評(概略)は、「研究の労を多とするも 戦争というのはやってみないと分からないもの、机上の空論とまでは言わないまでも、戦争の意外裡の要素が考えられていない」と言う趣旨であった。確かに日露戦争の勝利にせよ、まして日本海海戦の完璧な勝利を予想した人は居たであろうか。日米開戦初頭に行われたミッドウェイ海戦で主力空母4隻喪失という大失態を誰が予想したであろうか。これが戦争の持つ「意外裡」なのであろう。

この研究所の目的は、研究成果を国策に反映するためのものではなく、広い見識を持った人材の育成と言うところにあったのである。研究機関と言うよりは教育機関であり、イギリスの帝国国防大学を手本にしたものと言われる。たしかに敗戦後の日本の復興に貢献した多くの人材を輩出している。

＜以下、左下欄に続く＞